岡部コラム　2

「我々は同じくユニフォームを着る者である」

理事長　岡部　俊哉

はじめに

本年8月7日（金）、岩田清文副会長とともに、台湾の高雄市において、「漢光42号実兵演習」及び「都市強靭性（防空）演習」の一部を研修する機会がありました。

1　各演習の概要

「漢光演習」は、国防部・軍が主催する実動演習で、本年は8月5日（水）から14日（金）までの間、「漢光42号実兵演習」として実施されました。台湾の報道機関によりますと、かつての所謂展示・デモンストレーション演習から脱却し、本「漢光42号」においては組織改革と訓練に重点を置く、台本のないシナリオによる生地での実戦的な演習であり、「全旅団動員・戦力回復効率」「全社会防衛強靭性」「突発的状況への対応・指揮対応」などを主要演練項目としていました。

「都市強靭性（防空）演習」は「漢光42号」に統合された形で、「全社会防衛強靭性」を演練するものであり、国防部等が主管するとともに、国防安全会議や行政院（内閣）などの方針のもと、各地方自治体（県・市）が主催して、統制された「防空演習」及び通信速度低下への対応を訓練する「モバイル通信速度低下訓練」の他、各地方自治体計画の「災害救援訓練」「動員訓練」等を実施するものです。

「防空演習」は8月7日と10～13日にかけて、南部、中部、離島、東部、北部の順で各地域ごとに、日中の30分間実施され、防空警報下、交通規制が敷かれ、走行中の車は路肩に停車、通行人は屋内や地下に退避する等、警察や憲兵などの指示に従うことが求められました。

「モバイル通信速度低下訓練」は台湾初の大規模な訓練で、8月10日及び13日に中部地区及び北部地区において「防空演習」と並行して実施されました。報道によると、有事における政府の対応能力の検証及び民衆自らのバックアップ体制整備の重要性周知・レジリエンス意識の向上が狙いです。今回の訓練は、基本的な通信は通常どおり利用できるものの、日中の30分間にわたり通信速度を低下させ、動画配信、ビデオ通話、モバイル決済など、大容量通信サービスに影響を及ぼすものでした。

2　実際の研修

まずは、高雄市において、「漢光42号実兵演習」の一環である、台湾海軍の左栄総医院が実施した「軍・公・民間医療

統合による負傷者移送及び医療キャパシティー移転訓練」を研修しました。

本訓練は、国防部軍備副部長の統裁のもと、国防部軍医局が主催し、軍病院及び民間病院が演練したものです。前線から高雄市所在の海軍病院に後送されて来た負傷者を、同院から複数の民間病院に移送して兵士の身体・生命を守るとともに、大量の負傷者発生時に備え、海軍病院が対応するためのキャパシティーを常時確保しておくことが狙いです。

本訓練に参加した高雄市に所在する民間の義大医院は、有事には同院のワンフロアを一般患者と区分した戦傷者受け入れ専門病棟として50床確保できる様になっています。海軍左栄総医院から負傷者移送受入れの依頼を受けた義大医院では、事前に連絡員から症状等患者の情報を入手するとともに、受け入れ態勢を整えて待機、到着とともに速やかに患者を申し受けて、治療を開始します。

訓練終了後、ＡＡＲ（事後検証）にも参加することができました。医学的・運用上の見地から様々な問題認識や建設的な意見が出ましたが、民間の義大医院長からの発言が印象深いものでした。

「本演習において我が医院を選定いただき、誠に光栄である」そして「我々は同じくユニフォーム（軍服と白衣）を着る者である。軍は台湾本土を守り、医者は台湾の人々の命を守る。互いに台湾を守っている。我々は12階（戦傷者専門病棟）を空けておく」という趣旨の発言を力強くされたのでした。台湾を守り抜く堅固な意志と、白衣というユニフォームを着る医療従事者としての決意が込められた、正に宣言でした。統裁官以下ＡＡＲに参加した者は、我々の様な各国のオブザーバーも含め、拍手喝采、大いに感動したことは言うまでもありません。

更に高雄市が主催する「都市強靭性（防空）演習」を研修しました。

高雄栄民総医院（公営）による「地下代替医療施設移転訓練」で、災害状況下における同病院の地下１階駐車場への病院機能の移転訓練でした。本訓練には蕭美琴（ショウビキン）副総統等の現地視察があり、更に蕭副総統が移転した各医療部署において熱心に質問される姿を鑑みるに、災害想定としながらも有事を念頭に置いた重要な訓練であることは明らかでした。

3　訓練研修所見

実質僅か半日ながら、得るものが多い誠に有意義な研修でした。

訓練のための訓練から脱却を図り、実戦に即した現地現物で訓練する「漢光42号実兵演習」は元より、30分間とは言え、社会生活・経済活動等に大きく影響する平日の日中という時

間帯を使って全土で演練する「都市強靭性（防空）演習」に、台湾海峡情勢の緊張感と台湾の防衛に取り組む真剣な姿勢を感得できました。

また病院が一般の実患者の診療を継続しつつ、演習にも積極的に参加するという、プロとしての誇りと本土防衛意識の高さに重ね重ね感激した次第です。

義大医院長の発言、「我々は同じくユニフォーム（軍服と白衣）を着る者である」が全てを物語っています。

軍主催の漢光演習での、特に戦闘訓練等の研修は叶いませんが、平行して行われる台湾を挙げた各種訓練・演習は、事前に計画が明らかになっている部分もあり、「我々にとって国を守るとは、危機管理とはどういうことなのか」等を具体的に学ぶ絶好の機会で、教訓の多いものでした。今後、国の機関、地方自治体、民間団体等から各種オブザーバーを派遣して、研修されることを大いに期待したいと思います。

本年9月8日、小泉防衛相と上野厚生労働相により、有事に負傷した自衛官の治療、救命等自衛隊の衛生機能強化についての協力確認がなされ、両省の次官級の協議会を設けて具体的検討を進める旨の報道がありました。有事を見すえた両省の協力体制の整備は開始されたばかりで、既に実動訓練を実施している台湾のレベルまでは程遠い状態です。これからが正念場です。

更には国土防衛作戦においては、衛生のみならずあらゆる分野で、自衛隊・公共機関・民間の連携は不可欠です。

我が国の防衛・安全保障に関し、ＡＩや無人アセット等の防衛力整備に目が行きがちですが、足下にも課題は山積です。台湾に限らず他国から貪欲に学び、知恵を絞り、形振り構わず突き進まねばならない危急存亡の秋がもう間近に来ているのかもしれません。悠長にしている時間はありません。







【日本戦略研究フォーラム（ＪＦＳＳ）ＨＰ「台湾関係」、『「漢光42号実兵演習」・「都市強靭性（防空）演習」研修報告』（２０２６年８月24日）から転載】